

お誕生日おめでとう

組 ハラアズマー

祖国に思いを馳せながら、この短い小説を
以下に記します。

今日は私の誕生日です。特別な日になるは
おだし、たくさんおもちゃで遊べるはずです。

私は子供らしい無邪気さで家族が永遠に生き
続けるということをしも疑わなで家族を

見ています。色彩と笑い声が家の隅々まで広

がる。ピエロがいるし、おいしいケーキもあ

るし、大好きなお母さんの手料理もあります。

まてきなドレスを着てきれいなかみかざりを

つけようかな。

活気と幸せにみちた友人達に来て、誕生日

を祝ってくれ、パーティーゲームで遊んだり

最後には暖かい毛布に包まれた快適なベッド

で眠ったりできるでしょう。幸せな夢で満ち

あふれていた子供の痛みについて知ることか

できるでしょうか？まだ子供だから、大人の

痛みなど知らないはずですよ。

知らないはばですか...ね？

しかし、私は夢の苦しいそくぼくから起き
ました。現実では、私にはそんな特権はあり
ません。最愛の両親の無気力な体を見て私は
恐怖にふるえました。二人がかれきのほかほ
にうまるのを見送る前に、愚かにも最後の別
れを迎えてしまいました。なぜ私を置いてい
たのか？ほんの少し前パパとママは活気に満
ちあふれていました。ほんの少し前「好きだ
よ！」と言いました。どうやって生きていく
のか？私かふるさとと呼んでいた所はかれき
だらけの土地となっていて、鳥の平和のさえ
すりの代わりに母親、父親、娘、息子、兄弟
姉妹のさけびこえと泣き声が耳にひびいてき
ます。安全地帯とせ人げ人された場所でモド
ローンやばくだんの音が瘦れた希望をふみに
じっています。

私の誕生日ですか、きれいな服や靴をはく
ことはできませんでした。そして、髪はみだ
れて絡ま、ていました。パーティーもありま

せん。誕生日のお祝いを言ってくれる人もい
ません。

しめ、たテントの中で、星のない空のした
に私は寒い地面にくるま、て眠ろうとしてい
ます。でも、私の夢は静かではありません。

泣き声、血のプール、ぶろ下か、ている体、
頭から分離した死体すべて夢に住んでいます。
無邪気に幸せな夢を見ることももうできな
いのです。

誕生日なのに、まだ子供なのに、私は生活
が当たり前ではないことに気づきました。ジ
ノサイドにいる様子を、特権を持つほかの人
達が安全であたたかい場所からスロリーンで
映画のように私達を見ています。彼らはスロ
リーンを閉じ、なげくことができませんが私と
私の国民はできません。特権な彼らは何もな
かったように普通の生活にもどれるけど、私
達「貧しい」人々は身を守る手段を何も持っ
ていません。同じスロリーンから「あの国民
はとてもしっかりい人だ！おぼろしい！」と称賛し

ます。理解と行動さえあれば私達を現実から
 助けられるのに…。われわれのふるさとには
 私達を数字でしか見ない。そのような欲深く
 じゃあくな人々によつてはかいされました。
 この狂気を止められる人間がいるのに世俗的
 な快楽の追求にその力を使います。生き延び
 るために、われわれは強くなるしかない。祖
 国や平和への愛が私達の原動力です。それで
 もやはり、われわれは「選ばれた民」ではあ
 りません。人間、苦しむ人間です。別々の経
 験があります。希望もあります。
 私は子供で、今は誕生日です。
 自国が抑圧された環境のもとに生まれた人
 々へ：私はあなたの苦しみを完全に理解でき
 るわけではありません。私と家族はパレスチ
 ナ人で、強制的に出国させられましたか、い
 つかはパレスチナにもどりたいと願っています
 す。写真でしか私は痛みを感じることはできま
 せん。自分のふるさとがくりかえし利己的な

欲によってこうはいする様子を見ることの痛みは、私はすべて理解することはできません。この感情はパレスチナだけでなく、スーダンやコンゴやウイグルやアルメニアなど権力によるよくあつは文化がゆたかな国々にも広がっていきます。この話はさまざまなインタビューとこの国の国民の状況にもとづいて自分なりに祖国の子供達の気持ちに寄りそって書いた小説です。この小説を通して、誰かの人間性にひびき、一人で学び、ほかの人々の長く絶望的な現実について知ってもらえたらと思います。